

ンスが大切です。大事なラインに(3)の打鍵法がいつも出来ている様に心がけましょう。

(10) 強拍で自然に手が降り→弱拍で自然に手首、ひじが上がる、の繰り返し。(ただし例外は前後の流れによって多々あり)

これは(5)との関係をうまく保ちながら進めてほしい。この息使いがわかることこそ「フレーズを生かすための打鍵法」への第一歩の技術だと思います。

(11) 腕を落とす奏法、けり上げる奏法

fでもpでも腕を落として弾く方法と、けり上げて弾く方法の両方を知っておきたいものです。

譜2 ショパン：アンプロンプチュ2番より

譜3

譜4

譜5

(12) ハーモニーの色の感じ方

これは打鍵法がどんなに理解出来ても、音色への配慮の耳がなければ美しい音楽のフレーズは生かされない事です。長、短、減、増、V7→I、ネアポリタン6等々、それぞれの和音の種類の喜び、悲しみ、渋み、痛みを感じていただきたいと思います。

● 2番アンプロンプチュを実際に分類して

冒頭Fisは楽に弦を響かせる様に、次に6小節続く左手のソロの上のメロディーは力を抜きながらうでの重さの乗せ方。7小節目から30小節目の冒頭までのゆるやかな歌い方に先ほど述べた打鍵法の(1)(2)

(3)(4)(12)の使い方を研究して下さい。(譜2)

30から38小節目までのやわらかいコードの動きに右上のメロディーのひびかせ方の配慮として、(1)a、(4)(9)の研究。(譜3)

47から59小節目までの左のオクターブの連続の時こそ(8)のうでのつけ根が硬くないか認識して下さい。特に付点の短い音を弾くときに力が抜けると楽になります。つまり長→短の間で力が抜けるのを確かめ、短→長の時には、どちらのオクターブにも楽に力が落ちることを意識しましょう。この時、間節はしっかりしておきます。(譜4)

62小節目からの右手は(3)ですが、特に左の分散和音をひく時、親指にも小指にも手首がしなやかについていく様に注意して下さい。決して不精してつっぱらずに。

83以降の右手の早いパッセージは(7)の親指のくぐりの研究をし、タッチとしては(1)の(d)で上に向かってクレッシェンド気味の時(2)の押しつけをしないように。しかし大事なのは、むしろ左のベースの動きで、(1)の(a)を左小指に。又その度々に出て来る(12)が最後に大きく弾く人の課題となってくるはずです。(譜5)

【第2回】

自立して解釈・表現できるようにさせる系統的指導法

～“なぜ”を説明して自分で音楽をつくらせよう～



秋山 徹也 先生

Tetsuya Akiyama
東京芸術大学講師
会報編集委員 検定・指導者育成委員

学習者は、教師の「ものまね」ではなく、自ら音楽を考えて解釈・表現していますか？。教師の“ものまね”や、言葉のイメージに頼る抽象的・主観的な指導では不十分です。中級レベルでこそ、自立した解釈・演奏をできるようにさせましょう。ピアノ音楽の解釈指導は、専門的で上級者相手の教育内容ではありません。ピアノ演奏の楽しさがわかりかけた中級レベルでこそ、自立して解釈させる指導が必要であると考えます。一貫性のある演奏、さらには個性豊かで音楽的な演奏ができるようにさせるためには、系統的な指導が必要です。

● 場面ごとに個々の表現法を指導して持駒のように覚えさせましょう

まず、音色に興味を持たせて、いろいろな音色が表現できるようにさせます。具体的な力の掛け方を物理的・肉体的に指導して、いろいろな音色の作り方を覚えさせましょう。良い音色を体験すれば、学習者は技術指導の必要性を実感し、ハノン・チェルニーなどの教則本を無機質な練習曲と感じなくなるはず。ペダル使用の原則(よく響かせる・つなぐ・音量を大きくする)を指導して、音色の幅を広げましょう(ペダルなしでもいいタッチであることは必要です)。また、美しい音・粒揃いの音など、プラスイメージの音色だけでなく、冷たい音色・堅い

音などのマイナス・イメージの音色も選択肢の中に入れてさせてみます。最終的には、演奏する曲にふさわしい音色を考えて表現できるようにさせることが重要です。

次に、適切な音量バランスで表現できるようにしましょう。最初は「メロディーは強く・伴奏は弱く」で指導してみます。旋律=右手、伴奏=左手とは限りません。和音進行の時は、最上声をやや浮き出し気味に、最低声部はやや深めにしていねいに、他の声部はやや控え気味に弾かせるようにします。最終的には、メロディーか・支持的な音か・伴奏的な音形かなどを、学習者自身に自ら探させ、適切に表現させるようにしましょう。こうすれば、左右の手の各指の、強さのコントロールをできなければならないことを、音と体で覚えるはずですから、学習者はここでも練習曲の意義を感じてくれます。必要に応じて、基本以外の響かせ方も体得させます(内声など一部に旋律がある時・ポリフォニー楽曲の場合・2台ピアノの曲の演奏・各種室内楽での楽器間の音量バランス・アンサンブルにおける演奏者間のバランスなど)。なお音量は、主として音形の上行や下行にあわせて変更させてみます。上行する場合はcresc.に、下行する場合はdim.になると指導しましょう。cresc.では最初からフォルテになりやすいし、dim.では最初からピアノになりやすいことに注意しましょう。

基本的な拍子は適切に表現できるように指導します。特に、シンクペーションの時のアクセントの位置などを、体で覚えさせましょう。アンサンブルや伴奏を体験させると、意外と拍子感を正せます。また、舞曲の種類に応じた、自然なリズムの習性を体得させます。また、徐々に速度変更させる感覚を体得させましょう。また、いつのどのような時代の誰の作品かを考えて、例えば音色・テンポの加減・強弱の幅・適切なペダリングなどを適切に決定できるようにさせることは重要です。

アーティキュレーションを指導する際には、最初は「前をテヌート・後を少し丁寧に」と指導すれば良いでしょう。なお、ボーイングスラーがかかっている場合は、実際の音のつなぎ方と同じではありません(譜1)。

譜1 モーツァルト ソナタ KV.332

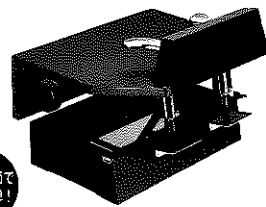
(ボーイングスラーがかかっている例。フレージングを示すスラーではありません。)

フレーズは、まず「最後の音を少し丁寧に静かに」で表現させてみます。大きいフレーズがある時は、

ピティナで育った補助ペダルM-60

ハイグレードなメカニズムでより豊かな表現力を。

「ピアノ本体のペダリングに限りなく近く」をテーマに、多くのプロフェッショナルからの貴重なアドバイスを基に開発された“M-60”補助ペダル。その確かな安定性と独自のメカニズムは、発売以来多くのコンクールやレッスンに使用され、絶賛を博しております。



つまみ調節で上下も簡単!

M-60ピアノ補助ペダル
定価 ¥37,000

◆会員特別価格 ¥32,000 (税、送料込)

※ペダル周縁の狭いGP2本ペダル用もごさいます。

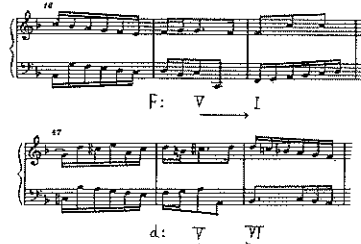
M-60専用キャリングケース
(キャスター、ストラップ付)
好評発売中! 定価 ¥13,000

◆会員特別価格 ¥11,050 (税、送料込)

お問い合わせ・お申し込みは、ピティナ購売部まで 03(3944)1581 総発売元

小さいフレーズにこだわりすぎないようにさせます。フレージングを示すスラーがない場合、最初は、教師がフレージングを設定してあげても良いですが、徐々に学習者自らがフレーズを設定できるようにさせましょう。まず、V度→I度の進行がフレーズを設定させる基本であることを指導すれば良いのです。しかしV度→I度に限らず、和音進行にフレーズ設定の原理がありますから、和声感・調性感を養って、感覚的に終止形がわかるようにさせることが重要です。例えば、V₇は終結感を強めます。また、V度→I度とV度→VI度では表現が変わります(譜2)。

譜2 バッハ インベンション 第4曲



(ひとことではいいたいがたいですが、V度→I度はストレートに緊張→弛緩を表わし、V度→VI度は意外性などを表わします)

和音の性格は多様です。例えばIV度とII度とでは、役割が同じ(サブドミナント)であっても、微妙に響きが異なります(譜3)。響きで違いを体験させてあげることが必要です。

譜3 モーツァルト ソナタ KV.333



(2小節目がIV度の和音でなくII度の和音であるため、一種ためらいのような気分を表わしています)

なお、和音の進行を感覚的に把握できるように、移調(奏)・伴奏づけ・即興演奏なども指導しましょう。また、楽譜をできるだけ正確に素早く読めるようにするために初見演奏なども学習させてみましょう。

● 曲全体の表現方法を指導しましょう

最初は、「同じ形は同じように・違う形は違うように」と説明して、同じ形は同じ表現をさせ、対照的な形の部分は対照的に表現をさせましょう。例えば、三部形式では、前後の部分がほぼ同じです。このような説明で前後の部分と中間部分とを対照的に弾かせることができます。同様に、徐々にいろいろな“かたち”も意識させましょう(二部形式・三部形式・ロンド形式 …)。特に注意を要するのが、ソ

ナタ楽曲と対位法楽曲です。

a. ソナタ楽曲の解釈

ソナチネ学習の時点で、ソナタ形式を意識させます。第一・第二主題は、違う調で書かれていますから、対照的に表現させてみます。展開部では、クライマックスであることを意識させ、曲の頂点を築き上げるように表現させます。再現部では、提示部と同じかたちが戻ってきますが、第一主題と第二主題とが同じ調で書かれています。ソナタ形式では、提示部では、第一主題と第二主題とが対立し、提示部では、第一主題と第二主題との対立を解消しているのです。つまり、緊張→対立→弛緩の構図が成り立っているのです。このことを学習者に気づかせれば、どのような経緯で曲が展開されているのか、ということに気づくはずですし、面白く曲を作ることができます。

ソナタ形式の曲では、緩徐楽章が「緩徐」楽章であるから飽きないのだ、と説明してみましょう。緩徐楽章では、徹底的に歌って弾かせます。前後の両楽章が速い曲であるため、その対照性を示すことによって全曲を飽きさせずにまとめることができるのだ、ということを指導できるのです。曲の配列法を意識させるために、ソナタ楽曲は、全楽章通して学習させたいものです(この項の詳細は、当協会会報 Our Music 第203号 44頁～、第206号 46頁～も参照してください)。

b. 対位法楽曲の解釈

最初に、複数の声部が対等であると説明し、各声部を同じ強さで弾かせます。次に、今日のピアノで演奏する場合、旋律を少し浮き出し気味に演奏させてみましょう。その時、テーマと対位句とのバランスは、全曲を通して統一しなくてはなりません。



次に、全曲の表現方法を決定します。フーガでは、主題がある「展開部」と、主題のない曲のつなぎの部分になる「間奏部」とがあります。これを見抜けるようにさせましょう。

主題のある展開部の方は、しっかりたっぷり表現させます。間奏部は、逆にあまりたっぷり表現しないでさっと表現させます。展開部の中には、主題が同時に現われるストレッタがある場合もあります。一般にストレッタの時は、緊迫感や高潮感を表わし

譜4 バッハ平均律クラヴィーア曲集 第1巻 第6曲



(主題と反行主題とによるストレッタの例。緊迫感や高潮感が表わされています。)

ていることが多いと説明できます(譜4)。

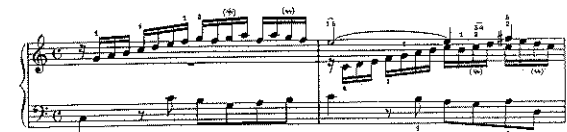
さらに、全曲からみた、各部分の位置を明確に表わせるようにしなくてはなりません。バッハでは、フレージングを設定させることも重要ですが、重要なフレージングであるか、小さいフレージングであるかを判断させることも必要です。曲の構成を理解させて、フレージングの大きさに応じた適切な表現ができなくてはなりません(この項の詳細は、当協会会報 Our Music 第199号 138頁～、第207号 40頁～、第210号 56頁～も参照してください)。

● 楽譜の取り扱い

これまで述べたように中級レベルでは、自立して解釈できるようにさせることが重要です。したがって、解釈の基となる楽譜の取り扱いが重要になります。中級レベルでは、学習者に本格的な楽譜の選択まで指導する必要はありませんが、少なくとも、原典版と編曲版との違いや、その扱い方に対する心得は指導する必要があります。原典版は多種類あります(譜5)。編曲版は、解釈の一例として捉えさせましょう。中級レベルでは、「原典版の方が良い・編曲版の方が良い」ではなく、学習者に最適だと思われる版を教師が選択してあげてよいと思います。

譜5 バッハ シンフォニア 第1曲

[上: ベーレンライター原典版 下: ヘンレ原典版]



(ベーレンライター原典版は、新全集に基づき、限りなく作曲者の意図に忠実です。一方ヘンレ原典版は、学習者の便宜を計って、指番号などを記入してあります)

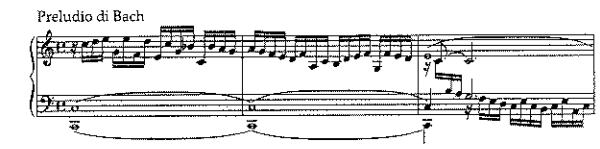
なお、原典版は常に改訂されています(譜6)。最新情報を研究しておく必要があります。教師は、最新の情報の分析・検討も行ないながら、適切だと思われる情報を、学習者に与えることが良いのです。

いろいろな体験を重ねて自由に解釈できるように



なってきたら、学習者本人は、楽譜を自ら選択・比較して学習しようとするようになってくるはずですよ。

譜6 バッハの平均律クラヴィーア曲集第2巻第1番 プレリュードから



(「バッハの平均律クラヴィーア曲集 第2巻」新全集の楽譜は、1995年によく刊行されました。目下絶大の信頼を集めている1950年版のヘンレ版とはかなり異なっています)

このように中級レベルでこそ、自立させる指導を行なって、一貫性のある演奏・さらには個性豊かで音楽的な演奏ができるように意識を向けさせましょう。これまでの学習内容によって、常識的な音楽表現はおのずと理解されるようになるはずですよ。実際の演奏では、学習者は、これらの組み合わせによって曲全体の解釈へ結びつけられるようになるはずですよ。

【参考】

今回の講座は、PTNA会報の Our Music に1995年6月から1999年4月に15回にわたって連載した「音楽通論研究」を基にしたものです。バックナンバーもあわせて参照していただければ幸いです。